
人生の楽しい終わらせ方

鳴瀬杏

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

人生の楽しい終わらせ方

【Nコード】

N3693Y

【作者名】

鳴瀬杏

【あらすじ】

——生きてるって感じたくて、死ぬ方法探してるんだよ、あたし

「カナタはさあ……クリオネに似てる」

「知ってる？ クリオネってさ、

……死んだら溶けてなくなるんだよ」

死にたがりの少女、サエキ。

生きたくない少年、カナタ。

死に方を探していたはずなのに、いつの間にか、
二人で生きたくなっていた――。

海に見える街で、静かに流れる
傷を舐め合う恋の話。

※野いちごにて連載中の作品を、書き直して投稿しています。

いち

目の前で、人が死のうとしていた。

助ける気になったのは、彼女の目に空が映っていたからだ。

◇

空を見上げたら、真っ青で綺麗だった。

だからちょっと、死んでみようと思った。

※

「……………さいあく」

かーんかーん、と踏み切りの音が響く中で、サエキは独り言を呟いた。

サンダルを拾い上げて、舌打ちすると、急にすべてのことがどうでもよくなった。

「お気に入りだったのになぁー」

オフホワイトのレースが可愛くて衝動買いした、ウェッジソールのサンダル。
何とでも相性がよくて、今年の夏はこれと黒いミュールをヘビロテだった。

でも、壊れてしまった。踏み切りを急いで渡ろうとしたら、線路に引っ掛かって足を捻った拍子に、ぽっきり。

まるで自分の現状を突き付けられてるような気がして、線路の上から動けなくなった。

あ、そうだ、死のう。



どうせなら最後まで綺麗なものを見ておくか、と思って、サエキは首を上に向けた。

風が通って、少し汗ばんでいた首筋を掠めていく。

髪が揺れた。

爽やかな日。

絶好自殺日和だ。

電車が迫り来る音を全身で感じるには、目を閉じた方が効果的だっただろう。

旋毛から爪先まで走る緊張感。タイミングを図るようなこと、死ぬ間際に、あまりにも野暮だ。

別に、選択の余地が、選ぶ自由があるわけではないのだ、自殺というものは。

自分の意志で、何かに殺される。

そのことに対する恐怖を煽るために、五感からの情報を限るべきだ。

それでもサエキは、空を見上げていた。

作り物めいた鮮やかな青を、睨み付けるように。

人の気も知らないでふざけんなよコノヤロウ。

今から死ぬからな、見とけよバーカ。

後になって聞けば、この時もし目を閉じていたら、サエキの人生は変わっていた（終わっていた）らしい。

に

結果から簡潔に言えば、サエキは死ななかった。

ごおおおおう、と、風が鳴る。ぎゃんぎゃんいいながら、大きな鉄の箱が通りすぎた。

迫る電車が視界に入っても絶対に瞑らなかった目は、今なぜか固く閉じられていた。

「線路はやめときなよ」

轟音に混じって、高さの残る声が耳元で聞こえて、サエキは瞼を上げた。

少年が、口を開く。

「俺の友達、東京で駅員やってんだよね。大変なんだよ、掃除」

抑揚のない話し方。表情にも抑揚がない。

それが、人命救助なんて正義感と優しさの結晶のような今さっきの行動とは結び付かなくて、サエキは声を出すのを躊躇う。

「なんで……」

「はい？」

「なんで止めた」

少年は表情を変えずに答えた。

「言ったでしょ。友達が駅員なの」

「そんだけ？」

「あと、それから」

目が青く見えた。

そう言いながら少年は、サエキの目を覗き込む。切れ長の、眠そうなおうな奥二重。黒目が大きい。睫毛が長い。

サエキは、呑気に観察なんかしている自分に気付く。

「……でも気のせいだった」

「なんで目が青いと助けんのよ。外人好き？」

「いや、てっきりサエキさんは日本人だと思ってたから」
「は？」

そう声を漏らして、ようやくサエキは頭を使いはじめた。

状況を理解する必要と、この後のことを考える必要がある。

まず、なんでこいつあたしのこと知ってたんだ。

相手をよく見ようと、目線を顔から下に下げた。

服装が目に入る。ジーンズにパーカー。派手なピンクのチェック。

派手なチェック？

覚えのある表現に、サエキは「あれ？」と呟いた。

童顔に茶髪のショート。顔に特徴ないから、ピンクのパーカーが目印にしてください、派手なチェックの。

昨日の晩に見た、チャットの文面だ。

「はじめまして。カナタです」

小首を傾げる目の前の少年に、サエキは口を開けたまま、首を上下に振る。

「あー……ああ！」

「サエキさんでしょ？」

「うん！」

色でわかった、と、サエキと合わせていた視線を、少し上にずらす。カナタの目印が目立つ色のパーカーなら、サエキの目印は髪の毛だった。

「メールで説明しただけなのによくわかったね」

「わかるよ。こんな髪の人、館町（やかたまち）に他にいないでしょ」

あまり明るくない茶色。

それだけなら至って普通、どこにでもいすぎてなんの特徴にもならない。

でも、サエキの髪は、空だった。

赤みを抑えた暗い茶に、深い青のメッシュ。

全体に散らばるように入ってはいるが、量のバランスがいいのか、汚ならしい斑とはほど遠い。

色合いは明るくないし、服装だって没個性的ないわゆる“流行り”のファッション。

それなのになぜか目を引くのは、夕暮れが終わっていく空のような、髪色のせいだ。

不思議な色合いの髪に目を奪われて、それが“サエキ”だと気付い

た。

次の瞬間には、踏み切りのバーを潜っていた。

黒いラインで縁取られた目尻。

気の強そうなメイクとは裏腹に、その表情にはなににもなかった。

真っ黒い瞳に空の色が反射して、髪と同じような藍色を作り出していた。

それが、綺麗だと思ったのだ。

だから、空が綺麗だったから、カナタは、サエキを助けたのだ。

さん

「つーかさあ」

独特の脈絡のなさで、サエキは口を開いた。

というか、と前置きをしたが、別にそれまでなにか違う話題で話をしていたわけではない。

それ以前に、話をしていかなかった。

「カナタ、すごい童顔なんだね。つーか女顔？ 文面とか大人っぽかったから意外」

「……別に」

少しだけ顔を背ける。

自覚しているし、コンプレックスに思っているわけでもないが、わざわざ言われて気分のいいものでもないんだろう。

カナタにとっては、サエキの遠慮のない話し方も、気の強そうな見た目も、少しも意外ではなかった。

話を逸らすように、カナタは手に持ったサンダルを差し出す。
サエキは踵の壊れたサンダルで不安定に立って、顔を歪めた。

「これでいいじゃん」

「ちよっと、ありえないしこんなショボいビーサン」

「だって靴直してる間の間に合わせでしょ」

「だからってさあ……。無駄な買い物はない主義なの」

「この間、服買いすぎて今月ピンチって言ってなかったっけ？」

「服は無駄じゃないでしょ。着るもん」

「そんなに買って、全部着れるの？ そのうち、一日に3回くらい

着替えなきやいけなくなるかもよ」

やりとりだけなら、チャットでの会話とほとんど変わらない。中身のない軽口の叩き合いで掲示板のレスが埋まるのを避けて、わざわざ二人限定のチャットルームを用意したのだ。

それはいつからかメールになり、自然と、コミュニケーションを取っている時間が長くなった。

カナタが十日ほど前、サエキの住んでいる館町に引っ越してきたのをきっかけに、会って話す方が早いんじゃない、ということになったのだ。

ただ、掲示板でもチャットでもメールでも味わえない、相手が笑っている、笑っていることを感じられる、という感覚が、どうも不思議だ。

カナタの目の前にいるサエキは、ウェッジソールのサンダルを3足ほど見比べながら、言う。

「用事ってなんだったわけ？ 彼女の呼び出し？」

近くで店員が、行儀良く立っている。

「他のサイズもお出ししますよ」とか「色違いもございます」とか、隙あらば話しかけてくるつもりなんだろう。

カナタは、そういうテンプレ的な積極性があまり好きではない。

「違う」

「なにが？」

「彼女はいないよ」

「まあ、リア充があんなところ出入りするわけないか」

「サエキさんは？」

「いないよ。彼氏はね」

「彼女はいんの」

「さあ、どうでしょうね」

ふうん、と、興味なさそうに返す。

サエキは、「これにしよ」と言っ、棚の下に押し込まれた箱を眺めはじめた。

カナタも一緒に屈んで、聞く。

「いくつ？」

「22半」

「ちっちゃいね」

「うるさいなー、気にしてんの。そっちだってそんなにでかくないじゃん。何センチ？」

「いいだろ別に」

後ろに人が立つ気配がした。店員だろう。

カナタは自分の右横にあった箱を、「ほら、これじゃない？」と指差す。

箱の蓋をずらすと、コルクの厚底に、薄いベージュのトーションレースが見えた。

サエキが今履いている壊れたサンダルも、似たようなリボンの、似たようなデザインだ（きつと彼女にして見れば、全然違うんだろうけど）。

「……好みは意外と乙女だね」

「うっさいよ」



「さっき、無駄な買い物はしないって言ったじゃん」

斜め前を歩くサエキが振り返る。

カナタは、キーホルダーを手に揺らしてみせた。

半眼とへの字口が、妙に可愛くない猫のマスコット。手足が細長く、三角形の上に台形を重ねたような体型をしている。

箱を抱えてレジに向かったサエキが、戻ってきた途端にカナタに「レジ横に可愛いのがあった。あげる」と手渡したのだ。

「こーゆうのは無駄じゃないのー」

「どこが？」

「お近づきのしるし。カナタに似てたから」

「え？　はあ……どうも、ありがとう」

反応うつす！と、サエキが笑う。

カナタは感情が見た目に出ないというだけで、中身まで抑揚がないわけではない。

でも、それをわかってくれる人は今のところ、一人もいない。

これに似てるのか俺、と、眠そうな猫の人形を眺めて、口を開いた。

「でも、やっぱ意味ない気がする」

「キーホルダー？　素直に受け取っとけよー」

「サエキのサンダルも。……どうせすぐ履かなくなるじゃん」

今が秋だから、という意味ではない。

この先ずっと、ということだ。

「誰か履くかもしれないじゃん」

「姉妹とかいんの？」

「えーと……今どこにいんのかわかんない姉ちゃんが」

「……どうせだから最後に全部売ってさっぱりしちゃえば？」

二人が話しているのは、将来のことだった。

近い将来。

そして、その先はない。

「うーん売るかぁ……」

「どのくらいになる？」

「服とか靴とか……ゲーム、CDに漫画に……十五万は下らないかも。でもそのお金どーすんの？」

「最後に使えばいいじゃん」

「えー？ なにに使う？」

「演出？ 十五万もあれば結構色々できるよ」

「例えば？」

「んー……豪華ホテルの一室で、派手なドレス着て、とか」

「あ、ちよっとそれ色々考えよう。どんなのがいいかな」

来週の旅行、どこに行こうか。

ちよっと遠出してみたいよね。

そんな話をするノリで、カナタとサエキが話しているのは、人生の最期の彩り方だった。

「やっぱどーせ死ぬならさー、派手にいききたいよね」

よん

【自殺】今までにない死に方を考える 【方法】

3 2 7 名前…名無し … 2 0 X X / X / X (水) 2 3 … 1 8
I D … ??? ?
ちょっと聞いてくださいよう

3 2 8 名前…名無し … 2 0 X X / X / X (水) 2 3 … 1 9
I D … ??? ?
今日、踏み切りに突っ立ってたら、助けてくれた人がいて

3 2 9 名前…名無し … 2 0 X X / X / X (水) 2 3 … 2 1
I D … ??? ?
飛び込み? なんでもた

3 3 0 名前…名無し … 2 0 X X / X / X (水) 2 3 … 2 3
I D … ??? ?
や、特に理由ないんですけどー
なんとなく、今しんでもいいかなー? って

3 3 1 名前…名無し … 2 0 X X / X / X (水) 2 3 … 2 8
I D … ??? ?
飛び込みは絶対やめた方がいい
汚いし失敗した時が最悪

3 3 2 …名無し … 2 0 X X / X / X (水) 2 3 … 3 5 I D …
??? ?

俺が今日乗った電車も止まった
おかげで仕事に1時間半も遅刻

3 3 3 名前…名無し .. 2 0 X X / X / X (水) 2 3 .. 3 9
I D .. ????

ね、ふつーそーゆう止め方するでしょ

なのにそいつ、俺の友達が駅員だからって

掃除大変だからやめろって

なんか馬鹿馬鹿しくなりましたw

3 3 4 名前…名無し .. 2 0 X X / X / X (水) 2 3 .. 4 0
I D .. ????

無責任

つーか自分勝手

3 3 5 名前…名無し .. 2 0 X X / X / X (水) 2 3 .. 4 3
I D .. ????

そんなところで死のうとする方が自分勝手だろ

自分本意ではあるけど正論

3 3 6 名前…名無し .. 2 0 X X / X / X (水) 2 3 .. 5 1
I D .. ????

てゆうか、今時自殺止めるとか

まじかつこよくないですか? w

3 3 7 名前…名無し .. 2 0 X X / X / X (水) 2 3 .. 5 6
I D .. ????

確かに、なかなかいない

本気で死のうとしてる時に現れたらやだな

3 3 8 名前…名無し .. 2 0 X X / X / X (木) 0 0 .. 0 1
 I D .. ? ? ? ?
 でも訴えられても文句いえない

3 3 9 名前…名無し .. 2 0 X X / X / X (木) 0 0 .. 0 6
 I D .. ? ? ? ?

裁判って時間かかるんじゃないの？
 訴えてる暇あったら死ぬわ

3 4 0 名前…名無し .. 2 0 X X / X / X (木) 0 0 .. 1 1
 I D .. ? ? ? ?

死ぬ前に金使うなら、何に使います？

3 4 名前…名無し .. 2 0 X X / X / X (木) 0 0 .. 2 0 I
 D .. ? ? ? ?

風俗

3 4 2 名前…名無し .. 2 0 X X / X / X (木) 0 0 .. 2 5
 I D .. ? ? ? ?

好きなもの腹一杯食う

3 4 3 名前…名無し .. 2 0 X X / X / X (木) 0 0 .. 3 2
 I D .. ? ? ? ?

3 4 2 < <

その後首吊りか葉飲んだら、全部垂れ流しちゃうけど

※

F r o m ..サエキさん

件名..なし

2 0 X X / X / X 0 0 .. 3 2

本文..

なんでもいきなり話変えちゃったわけ？

あれカナタでしょ笑

T o ..サエキさん

件名..R e ..

2 0 X X / X / X 0 0 .. 3 9

本文..

別に。

てゆうかなんであんなこと書いたわけ？

F r o m ..サエキさん

件名..R e ..R e ..

2 0 X X / X / X 0 0 .. 4 1

本文..

怒ってる？

ごめん

T o ..サエキさん

件名..R e ..R e ..R e ..

2 0 X X / X / X 0 0 .. 4 9

本文..

怒ってない

でもやめた方がいいと思うよ、叩かれるのサエキさんだから

F r o m ..サエキさん

件名..R e ..R e ..R e ..R e ..

2	0	X	X	／	X	／	X	0	0	∴	5	2
本文∴												
心配してくれてんのかー（・ω・）												
明日ひま？												

こ

「サエキさんはさ、一人で死ぬのが嫌なわけ？」

啞えていたストローを離して、カナタはぼそりと言った。

少なくともサエキが見たことのあるカナタはいつも、こんなふうに声低い喋り方をする。

声変わり前の中学生のような声を、気にしているのだろうか。

「んや、別に？」

「じゃあなんで俺と会おうとか言ったわけ？」

「なんとなくだよ。どんな人間なのか気になっただけ」

「そんな気になるほど面白い書き込みした覚えはないけど」

目立つ方でもなかったじゃん、と呟いて、カナタはフォークを口に運ぶ。

サエキが立ち上げた『他にはない死に方を考える』と題した掲示板に、半年ほど前のある日、新参らしい書き込みがあった。

丁寧語なのに生意気さが滲み出た物言いや、やけに幅広い知識。

多少アブノーマルな内容の掲示板なら、そのくらいの変った人間はゴロゴロいる。

カナタが他と決定的に違ったのは、その物の見方だった。

自殺志願者の集まる掲示板で、自殺を勧めることは絶対にせず、かといって止めもしない。

方法に関しても、痛くも苦しくもない楽な死に方を考えるのではなく、タイトルの通り、まさに『他にはない死に方』を考えるための議論だけしていた。

生に対しても、死に対しても、何の執着もない。
生きなくていい。それだけ。

死にたいと思って積極的に死に方を探す自殺志願者たちが、カナタと比べれば、とても行動的に見えた。

「あたしき。楽に死にたい、っていうの、ちょっと違う気がする」
「違うって？」

「だって死ぬんだよ。それって、決めるまでに散々悩んで考えて考えて考えて出した結論じゃん。あたしが思うに、自殺の一番大変なところって、最初に自殺しようと思うと決めることだと思うわけだ」

「ふうん」

返事適當すぎ、というサエキの非難の声に、カナタは少しだけ眉を顰めてみせる。

場所はファミリーストラン、時刻は夕方6時半。

あまりにも状況とミスマッチな会話に、真剣な返事なんて返していたら、明らかに怪しい二人だ。

「カナタはさ。楽な死に方なんて、一個も考えてなかったじゃん」

「あれは……別に、思い付かなかっただけで」

「うそ。考えようとしてなかったんじゃないの？」

「まあ、確かに……楽に死にたいと思ったことはないよ」

サエキは一つ頷いて、オムライスを口に運んだ。

ふわふわトロトロとはほど遠い食感だが、構わない。食べられれば何でもいい、とまではいかないが、サエキは意外と味に頓着しないほうだった。

無表情でカルボナーラを頬張るカナタに、サエキは言う。

「すごい不味そうな顔して食べてんね」

「うん、不味いからね」

「まじ？ あたし別にそうでもないけど」

「サエキさん、どんな舌してんの」

見るからにパサパサの卵と、不健康そうなケチャップ色のチキンライスを見て、カナタが言う。だがその表情にも声色にも一切の感情を感じさせないので、サエキも今一何も感じない。

「あたし、食べ物にはこだわらないことにしてんの」

「なんで？」

「だって死ぬまでに美味しいもの食べ過ぎて、いざ死のうとした時に、あーあれもう一回だけ食べときたいなあ、なんて思って、死に損ねたら嫌じゃん」

「意思弱すぎだよ」

ろく

「ね、あのキーホルダー、使ってる？」

唐突に変わった話題に、一瞬頭がついていかなくて、カナタは口籠った。

口の中でもたもとと留まる冷たいパスタを無理矢理咀嚼して飲み下して、アイステイーを一口飲んでから、口を開く。

「サエキさんさ、いくらなんでも脈絡なさすぎ」

「カナタお行儀いいね」

「まともに会話する気あんの？」

「してるじゃん、今」

一体どんな会話をして育ってきたの、と言ったら、サエキがにこりと笑った。

真意がまったくわからなくて、カナタは片方の眉を動かす。

「キーホルダー、使ってるよ」

「ほんと？ 何に付けてる？」

「……自転車の鍵」

「へー。自転車、乗るの？」

「乗ってない」

サエキが唇を尖らせて、「それ使ってるって言わないじゃん」と文句を言う。

子供みたいな仕草だと、カナタは思った。同時に、子供は絶対にしない仕草だろう、とも。

「結局ね、あたしが一番気になんのは、垂れ流しってことなんだよね」

「しょうがないよ、それは。人間の体がそういうふうに来てる以上は」

「自室で首吊りとかしちゃったら、部屋中臭いとかひどいわけでしょ？ 全部台無しじゃん」

「そんなこと言ったら、本当に綺麗な死に方なんてそうないよ？」

「一酸化炭素は？」

「死んだら筋肉が弛緩するからね。どんな死に方でもだいたい垂れ流すことに変わりないでしょ」

「薬も種類によるのかなあ……やっぱしばらく飲まず食わずしかないのか」

「食べたものは薬でも飲んで出せばなんとかなるけど……水分はそうもいかないね」

「あ、そっか……」

ううん、とサエキが唸る。考え込むような、真面目な顔。

カナタは、鼻で溜め息を吐いて、言った。

「爆死は？ 弛緩する筋肉も残らないよ」

「原型留めないのは嫌だよ、身元もわかんないかもしれないじゃん」

「わがまま」

「水死も見た目酷いし、最悪発見もされないしな」

腕まで組んでぶつぶつと呟くサエキに、カナタは言う。

「川ならどう？」

「かわ？」

「どっか山ん中入って行って、上流の方から遺書何通か流すの。そんで葉か、腕切って水につける。垂れ流しても川に全部流れるし、ロケーションもいいし、遺書見つければ探してもらえるし、川は浅いから発見はそんなに遅れない。血は残らず抜けるから真っ白になっちゃうけど、それはそれで綺麗」

抑揚のない声で語られる淡々とした説明は、それでもサエキの脳内に、一つの情景を浮かび上がらせた。

青空の下、ごうごうと流れる川に体半分浸かって、眠るように目を閉じている自分の姿。清々しい緑に囲まれた、真っ黒な服の、真っ青な死体。水に濡れた青い髪が顔に張り付いている。

神秘的で幻想的で、どこか耽美的な、美しい自殺現場。

「考えとく」

小さく笑って一言そう言ったサエキの意識は、その瞬間だけ、冷たい水の中で死んでいた。

しち

カナタの携帯電話に、知らないアドレスからメールが届いたのは、その夜のことだった。

数年前のあるアルバムの、表題曲のサビが、低音質で数秒鳴る。カナタが唯一好きな歌手の、唯一買ったCDだった。

誰からのメールかは、わかっている。

サエキだ。

ファミリーストランでの気だるげな食事のあと、彼女に押しきられる形で、アドレスを交換したのだ。

今までだって何度もメールのやり取りはしていたが、それはチャットで教えた、サブアドレスでだった。

携帯電話は静かになる。

しかしカナタは、それを開く気になれなかった。

背面ランプが、青く点滅する。

二回光って、忘れた頃に、もう二回。その繰り返し。

それがうざったくなくて、手を伸ばして、携帯電話を引っくり返した。

裏返してもなお隙間から漏れる小さな光に、カナタは、帰宅してから、電気をつけていなかったことを思い出す。

少し腰を浮かせばスイッチには届くが、それもしない。何もしたくないと感じた。

どれだけ小さな光でも、まわりが真っ暗だと、こんなにも明るく感じるのだ。

こんなに小さな光が明るく感じるのは、まわりが真っ暗だからだ。

無性に苛々した。

長いシャツの袖を、捲る。

白いTシャツだから、汚れれば洗濯が面倒だ。

脱いでしまおうかとも思ったが、それも嫌だった。

机の引き出しを、ゆっくりと開けた。

文房具やなんかが無造作に詰め込まれたそこに、あまりに自然に溶け込んでいる、武骨なそれ。

かち、かち。久しぶりに聞いたその音をBGMに、思い浮かんだのは、なぜかサエキの顔だった。

死にたいと願う少女。

そのくせ、頭に浮かぶのは、唇を歪めて、涙をぼろぼろ流して、恐怖に怯えた顔で命を乞う姿。

（苛々する、）

残像を掻き消したいと思った。できるだけ荒々しく、できるだけ残酷に。

暗い部屋で、裏返された携帯電話の灯りが、どこかで光る。

血が煮えるような感情の昂りを、治めるには――血ごと流し出すのが一番だ。

カナタは、カッターの刃を、細い手首に添えた。

はち

（最近、連絡ないな）

いらっしやいませえ、とやる気のない声を聞きながら、サエキは携帯電話を見た。

夕方から入っていたアルバイトも、もう終わりだ。忙しくはなかったが、疲れはした。

夏の終わり、コンビニエンスストアの店内は寒い。外が涼しくなったのだから店内の空調の設定温度も上げればいいものを、なぜか世間は、女性の体に優しくくない。

Tシャツの上に羽織ったパステルイエローのパーカーに、思い出したのは、コンビニ店員なんかよりもっとやる気なさげな、あの顔だった。

お疲れさまです、と、声をかけて、お菓子の棚を眺める。

チョコレート菓子とスナック菓子で悩んで、「太るよ」と言うカナタの声を想像した。あの無表情で、でも言ったあと、ほんの少しだけ笑って。

（電話、してみっかな……）

カナタなら、出ないだろうと考える。

メールの返事だって半日遅れが当たり前なのだ。

コミュニケーション能力の低さなら、サエキが今までに会った人間の中で、群を抜いている。

結局カゴに菓子を二つ入れながら、携帯電話を取り出す。
十日ほど前にはじめて本アドレスで送ったメールの返事は、まだ来ていない。

雑誌の表紙を流し見て、飲み物のコーナーで一度立ち止まる。小鳥がサイレンを真似したような音と、「らっしゃーっせえー」という、舌の回らない掛け声が響く。

（なんか忙しいのかな）

それとも、避けられているのか。
サエキの頭では、他にメールを返さない理由は思い付かない。

カナタの声が聞きたい。

自然にそう思っていた。自然にそう思ったことに、驚いていた。
やる気なさげな、少し眠たげな、生意気そうな高めの声。ぼそぼそと、口を大きく開けない話し方。

声が生意気なら、言うことはもっと生意気だ。一応敬称をつけてはいるが、そこに年上の人間に対する遠慮や敬意は、少しも見られない。罵詈雑言も平然と口にする。

それでも、今無性に、カナタの声が聞きたかった。

（やっぱ、電話しよ）

1. 5リットルの緑茶のペットボトルを手取る。
そして、弁当の棚へと、振り返った時だった。

思わず、声が出た。

「……カナタ？」

切れ長のたれ目はこちらを向いて、一瞬大きめに開かれた。
そしてそのあと、カナタの顔に浮かんだ表情は、『しまった』とで
もいようなものだった。

きゅー

サエキは、なにか言おうとして、口を開いた。

「カナ、」

「千空ちゃん」

しかし、背後から突然かけられた声に、驚いて振り返ってしまう。へら、と曖昧な笑顔を浮かべた、アルバイト仲間の姿があった。

「千空ちゃんも今あがり？」

「え？ あ、はい」

「もう帰る？ 送ってこうか」

「あー、いや、大丈夫です」

空気の読めねえ奴、と心の中で悪態を吐きながら、同じくらい曖昧に断りを入れる。

先輩の好意（下心があったとしても、恐らく、大抵の場合、親切心に変わりはない。例外もあるにはあるが）をはっきりと断るのはなんだか気が引けて、首を横に振るのはやめておいた。

両手をダム代わりに胸の前で開くが、それで彼の勢いが塞き止められるわけでもない。テトラポットの役割すら果たさなかった、といったいい。

「でも、外真っ暗じゃん。女の子一人じゃ危なくない？」

「へーきですよ、家、近いし」

「そう？ なんかあってからじゃ」

「あー……えっと、一人じゃないんで。ちょうど近くに友達いて、

これから会うつていうか」

そう言った時、先輩の顔ははっきりと、あまりにもわかりやすく、
がっかりした色を浮かべた。

例え下心よりも親切心の方が比率としては大きかったとしても、な
んとなく、そういう事態は避けておきたい。

すんません、今はあんたなんかどうでもいいんで。やはり心の中で
だけ詫びを入れて、「それじゃ、お疲れさまです！」と、レジに向
かった。

カナタの姿はすでに、見当たらない。

※

「あそこで帰るか、ふつー」

あんなタイミングでサエキの前に現れて、その上こんなタイミング
で姿を消すなんて。しんじらんねー、と、唇を尖らせながら、店を
出る。

あんな表情を浮かべられたら、なんとなく、引き留められなかった。
メールの返事が来なかった理由も、想像がついてしまったのだ。

下を向いて、菓子に入ったビニール袋がガサガサ揺れるのを見なが
ら歩いていると、視線を落としたコンクリートの先に、見慣れたス
ニーカーが見えた。

サエキは顔を上げる。

カナタは片手を挙げた。

「おつかれ」

パーカーにジーンズ、といういつもの格好で。

感情の読めない無表情で。

少し気だるげな立ち姿で。

サエキがあんなに聞きたいと思っていた、抑揚のない声で。
カナタがいた。

じゅう

「……帰ったのかと思った」

サエキが呟く。拗ねたような声色になっていることに気付いて、内心で舌打ちした。

なんとなく、距離感を掴めない。

たった十日のブランク、なんてことはないはずなのに。久し振りじゃん、と言って、どうしてメールの返信をくれなかったのか、なにか新しい自殺のアイディアでも思い付いたか、カナタの返事があったてもなくても、とにかく口だけ動かせばいいはずなのに。なぜか、サエキの唇は、開きづらかった。

「家……、近所なの」

やっと一言、言う。言ってから、話題の選択を明らかに間違えた気が付く。

カナタは前を向いて、壁に背中を預けたまま、言った。

「チアキっていうんだ？ 本名」

これは、仕返しだ。踏み込んだことを聞いたことへの仕返しと、牽制。

サエキは少し苛立って、さっきよりも大きな声で言った。

「聞いてんの、あたしなんだけど」
「教えない」

カナタは正面を向いたままだ。
サエキは、横に並んだ。冷たいコンクリートのブロック塀。
それから、気付く。この声が聞きたくて、しょうがなかったのだと。

「……けち」

「なんて字書くの？」

カナタは、マイペースに言う。
それがほんの少しだけ可笑しくて、サエキは顰めた眉間を緩めていった。

小さな声で、ぼそりと答える。

「……千の空」

ふーん、とカナタが囁いた。聞いておいて、薄い反応。
しかし、それがカナタなりの相槌だと、サエキは知っていた。まだ
出会って日は浅いが、きちんと知っていた。
サエキが真っ直ぐに立って歩き出すと、カナタは当然のように隣に
並んでいる。

「ね、なんでメール返してくんなかったの？」

「……あれ、返してなかったっけ」

「きてない。忘れてた？」

「あー、うん。忙しくて」

「それだけ？」

「それだけだよ。なに？」

「んー、や……、あたし暇だった」

隣から、くすりと笑う気配が聞こえた。

「掲示板にいればよかったじゃん」

「最近めんどくさい人いてさあ。すげー喧嘩腰なんだよね」

「ほっとけばいいよ」

「なんでもかんでも首突っ込んでくんの。ちょっとすれば飽きると思うけど」

「じゃあしばらくチャットに籠ってよーか？」

「うん、」

カナタが歩くのが速いのか、サエキの歩くのが遅いのか。

右を見上げると、いつの間にかサエキを少し追い越していた、カナタの横顔がある。視線を落とした。

パーカーの袖に隠れた、手。細くて綺麗で冷たくて、サエキは少し、気に入っている。

ポケットに突っ込まれっぱなしのその袖を、くい、と引いた。カナタが振り返った瞬間、悪戯が見つかったみたいに、どきりとする。

「ん？」

「……手、繋いでいー？」

わずかに空いた間に、緊張。

「なんで？」

「好きなの、人の手触るの」

ふうん、とまた気のない返事をして、カナタは「いいけど……、」と、口籠った。ちらりと、後ろを一瞥する。
そして、

「こっち。」

と言いながらサエキの腕を引く。

カナタの右手と、サエキの左手が触れた。男性的なゴツさのない、けれど女性的な滑らかさもない、冷たい指先。

カナタの横顔を黄色い光が照らして、すぐ横を、車が通った。歩道のない細い道だ。

「……あ」

また、どきりとした。

じゅういち

少し錆びた街灯の下で、サエキは立ち止まった。海風の吹かない場所のないこの町では、自動車も自転車も、街灯もポストも、すぐに錆びてしまう。

サエキの手に引かれて、カナタも立ち止まる。

「ここでいいよ。そこ、曲がったところだから」

「……そう」

なぜだか、サエキから手を離すのは躊躇われた。勝手に繋いで勝手に離すなんて、と思ったわけではない。そんなことは少しも気にしないほどにはサエキは大雑把な性格だし、わがままなところもあった。

単純に、離したくなかったのだと気付いたのは、少しあとのことだ。

「それじゃあ」

カナタから動くのを待ってはいたのだが、あっさりと離れていった温もりに、どことなく淋しさを感じる。

カナタが振り返る。一瞬、目が合った。

「おやすみ、……千空ちゃん」

聞きたくて聞きたくて仕方がなかった、カナタの声。低いテンションで名前を呼ばれる。

こんなに何の感情も籠らない声色で名前を呼ばれたのは、はじめて

だった。それなのにおどけた口調に、ムツとする。
握った右手で、カナタの肩を小突く。

「サエキって呼んでよ」

「……………サエキさん」

「なに？」

「おやすみ」

なんとなく、顔を上げられなかった。

でも、俯いたまま別れるつもりもない。せめて何か一言言おうと、
思う。

口を突いて出たのは、別れの挨拶でも、「おやすみ」と返すでもない、
往生際の悪さだった。

「カナタも本名教えてよ。……あたしだけとか、不公平」

「不公平って……なにその理屈」

「いーから。名前、なんてゆーの？」

自分の表情と口調が、拗ねたみたいになっていることは、サエキも
自覚していた。こんなタイミングでこんな話題しか思い付けない自
分に、苛立っていたのだ。

けれど、カナタの本名を知りたいのは、事実だった。不公平だとか
そんな理由ではなく、ただ、カナタのことをもう少し知っておいて
もいいんじゃないか、と思ったのだ。

やっと顔を上げて、顔ごと逸らしているカナタをじっと見つめてい
ると、たっぷり1分はありそうな沈黙のあと、カナタが口を開いた。

「……………夜」

そうしてぼそりと呟いたのは、言葉一つだった。
シンプルな名前。無駄を好まない、カナタにぴったりの名前だと、
単純にそう思った。

「……ヨル？」

「うん」

「そ……夜」

「なに」

「よる、」

「いいよ、呼ばなくて」

「だって、夜」

「なんだよ」

「どしたの？」

「……なに、が」

掠れた声。カナタの声も、サエキの声もだ。

カナタは目を伏せていた。長い睫毛から、目を離せない。

「泣きそうな顔してる」

たぶん、そう感じたのは、サエキだからだ。

本当はきつと、泣きそうなのは、サエキだった。理由はわからない。
白い瞼が、ゆっくりと上がっていく。間近で、サエキを見る。

本当に泣いているような無表情だった。

「……嘘言ってんじゃないよ」

「嘘じゃない。……ねえ、よ」

夜、と呼ぼうとした声は、不自然に奪われた呼吸の中に、掻き消えた。

じゅに

「この間」

なんでまたこの人と一緒にいるんだろうと思ひながら、カナタは口を開いた。

サエキがふい、と顔を上げる。

今日は天気がいい。青と茶の髪が、緩やかな風にさらりと揺れる。

「なんで、線路に飛び込んだりしたの」

遠くで、子供のはしゃぐ声が聞こえた。

うるさい、と感じる。カナタは、子供っぽい人間は嫌いではないが、子供は苦手だ。

「なんでかなあ」

「轢死と首吊りはしたくないって言ってたじゃん」

「なんとなく……さあ」

サエキが、足元を覗き込みながら呟く。

「なんとなく、今ならいけるかって思っちゃって」

「……冷静じゃないね」

けらけらと笑い声を上げる二、三人の幼児を、サエキは機嫌良さそうに眺めている。子供は嫌いじゃないらしい。

「意外と人いるね、連休でもないのに」

「もっと上流の方まで行けんのかな」

川なら、排泄物も血も全部流れる。水温が低いから腐食も遅いし、遺書を何通か川に流せば、発見が遅れたりもしないだろう。

考えておく、と言ったあの言葉は、本気だったらしい。

とある秋の週末、カナタとサエキは、二人でキャンプ場に来ていた。

「冷静じゃない、ねえ……」

どこか含みのある言い方が気になって、カナタはサエキの方に顔を向けた。サエキは、相変わらず走り回る子供を見ている。こちらを向かないまま、言った。

「冷静じゃないのは、カナタの方じゃん……」

カナタは、サエキの視線の先と一緒に眺めるふりをした。

責められているような気がしたからだ。サエキは明らかに、数日前、コンビニで偶然出会った夜のことを言っている。

自分でも、少し反省している——というか、どうかしていた、とあの後思った。

避けていたのだ。そして、サエキも明らかに、カナタが避けていることに気付いていた。適当に言い繕いはしたが、あんな言い訳、言い訳にすらなっていない。それなのに。

自分に説明のつかない行動を取ったのは、カナタが認識する限りでは、はじめてのことだ。あんな、自分から距離を縮めるようなこと。

いつの間にか『カナタ』と『サエキさん』に戻った呼び名が、余計にあの言動を思い出させる。

なんでもないふりをするのは、なにかがあったからなのだ。

カナタは、サエキを見た。虫除けのためにか、ふらふらと揺れたり跳ねたりしている。

いつにも増して飄々としたこの態度はつまり、カナタにも何もなかったふりをしていてほしいということなんだろうか。そのくせ、時々ぼそりと、カナタの心臓がどくと反応するようなことを言って。

振り回されている。そう感じた。

正直、少し、不快だ。

そもそもサエキに出会ってから、カナタの人よりゆっくりとしたペースは、崩されっぱなしなのだ。

苛々はしないが、体力と精神力は消耗する。“なんでもないふりが、ストレスを溜める。”

そこまで考えて、思考は結局、振り出しに戻った。

どうして自分はこんなところにいるんだろうか。

堂々巡りに陥るカナタの耳に、突然、金切り声が飛び込んできて、わずかに眉を顰めた。

じゅうさん

「マリ！　こら、走らな……！！」

「おわ、っと」

遠くからした女性の声が、不自然に途切れる。

振り返ったカナタの目に飛び込んできたのは、なぜか尻餅を突いたサエキだった。

「あーあーもう、だいじょーぶー？」

よく見れば、3、4歳くらいの小さな女の子が、その腕に抱かれて
いる。

つまづいたのを庇って、一緒に転んでしまったらしい。

「ありがとー、おねーちゃん」

「へへー、」

サエキが嬉しそうな顔をする。やはり、本当に子供が好きなようだ。
緩んだ表情で、どういたしまして、と言おうとした時、少女の母親
らしき女性が、血相を変えて走ってくるのが、カナタには見えた。

「マリ！？　あ……うちの子がすいません、　本当に！」

「え？　や、別にそんな……」

「ほらマリ、お父さんが呼んでるからいこう。本当にすみませんで
した、もう近づけませんので」

ぺこぺこと何度も頭を下げているが、決してサエキと目を合わせようとしなない。サエキが少しでも文句を言えば現金でも出しそうな勢いだ。

だが、大丈夫ですかとは一度も言わなかった。

サエキもその理由に気付いたのか、少し呆けたような顔をしたあと、苦笑いを浮かべて、静かに「気にしないでください」とだけ言った。

母親と少女が振り返って歩き出すの見送りながら、サエキは自分の髪に手を伸ばす。

カナタはその横顔を、黙って見ていた。

深い青が混じった、暗めの茶髪。色白の肌と相まって、どこか浮き世離れた印象すらある。

茶髪にピアスは不良、とまではさすがにもう誰も言わないが、それなりに奇抜な外見をしていれば、関わらない方がいいと普通の人は思うだろう。

小さい子供がいるならなおさらだ。自分の子供を、危険そうな人物にわざわざ近づける親などいない。

(……確かに、ちょっと怖いけど)

そういう反応、そういう世間の目を承知の上であの色に染めたのなら、あんなに傷付いた顔、することないのに。

思わず声をかけようとして、サエキの名前が喉まで出かかったところで、踏み止まった。

名前を呼んで、何を言うつもりだったんだろう。

自分でも予測していなかった自分の行動に、カナタが一人戸惑って

いた時だった。

あどけない声が、サエキの顔を上げさせる。少し離れたところから、一生懸命声を張り上げて。

「おねーちゃん！」

サエキの目が、丸くなった。ただでさえ丸い目が、くりんと大きく見開かれる。

足場の悪い草地を、足早に歩く母親に手を引かれて。その上無理に振り返るせいで転びそうになりながら、マリと呼ばれた少女は、叫んでいた。

「かみー、きれーだねー！」

それを聞いたサエキは、笑っていたのだろうか。カナタは彼女の方を見なかったから、わからない。

嬉しそうに、満面の笑顔を浮かべていただろう。そう直感的に思ったから、サエキの顔を見なかった。

自分が人の笑顔が苦手なのはどうしてなのか、カナタはいまだに満足できる答えを見つけられていない。

じゅうし

「ねーカナタ遅いー」

「サエキさんが速いんだよ」

「もう疲れたのお？　ちよっと歩いただけじゃん、弱っちなあ」

うるさい、と雑に返事をして、カナタは足許に集中することにする。形も大きさも少しの統一性もない石がごろごろと転がっていて、ちよっと気を抜いただけでもバランスを崩しそうだ。

「キャンプ場に来てなんでこんなことしてんの、俺ら」

「キャンプ場まで来といてなにそんなインドアっぽいこと言ってるの」

「インドアだよ。ついでに社会不適合者」

「あたしはアウトドア派なのー」

「自殺志願者のくせになんでそんなに元気なわけ？」

「あたし別に自殺したいわけじゃないよ。死んでもいいだけで」

屁理屈かよ。

岩、と言っているような大きな石を乗り越えて、カナタは一息ついた。サエキもそれ以上進もうとせずに、立ち止まっている。

横に並んでみると、その先は少し切り立ったようになっていて。ジャンプしても、ちゃんと着地できる自信がないのだろう。

溜め息を吐いて、カナタは足許に手を突いた。

「いてー」

飛び降りて振り返ってみると、サエキはカナタの胸よりも高い位置に立っている。足の裏がぴりぴりした。

ぺったんこのスニーカーで、サエキならば自分の肩より上の高さから飛ぶのは、さすがに躊躇してもおかしくない。

「ほら」

両手を伸ばすと、きょとんと見返された。
はじめてサエキを見上げた気がする。

「え」

「早くしないと、その辺蚊いたよ」

「え、え、嘘」

慌てて伸ばしてきた手のひらが、小さい。

全然違うな、と、擦れ違った自分の手と見比べて思う。

「大丈夫？」

「あんなちっちゃいガキにぶつかられたぐらいでコケるサエキさんと一緒にしないでもらいたい」

「飛び蹴りくらわすぞデメー」

「いーの？ 受け止めてやんないよ」

カナタの肩に、サエキの手が触れた。すでにほとんどの体重をかけているはずなのに、たいした負荷ではない。

ほんとにちっちゃいんだな、と思った瞬間に、サエキの足が岩を離れた。

「なんかカナタが初対面の時以来一番かつこよく見えたわー」

「そりゃどーも」

「うっぜー」

「なにがだよ」

ぼす、と効果音でもつきそうなほど軽いサエキの体は、足が地面に着くと同時に、するりと離れていった。

同じような作りのはずなのに、恐ろしいまでの差を感じる。

なんだか、異様に脆くて、異様に儚くて、あまりにも簡単に。

(……死んじやいそう)

岩場を器用に歩く後ろ姿を見て、カナタは思った。

サエキがぼきりと折れるように死んでいる様子を想像しかけて、意図的に、2秒でやめた。

「そんな靴でこんなとこ歩けると思った神経がすごい。尊敬する。まじ感服」

「わかりやすく馬鹿にしてくださる。うっせーよひきこもり」

「ひきこもってないよ。サエキさんに引きずり出されてんじゃない。こんな山人中まで、わざわざ」

「ありがたき思いなよ」

「それはこっちの台詞でしょ。俺とオフで会うことになってなかったら、一人で来るつもりだったわけ？ 休日のキャンプ場に。死に場所探してんの見え見えじゃん、そうじゃなかったら相当痛い子」

「は？ 来るし、普通に来るし。バンガロー借りてタクシーでコンロ運んで思いつきり楽しむし。なめんなばーか」

「今この状況でサエキさんに馬鹿って言われることほど心外なことってないね」

「あたしは馬鹿なんじゃないもん。ちよつと……一歩ツメが甘いというか」

「てゆーかこの状況がツンでんだよ、サエキさんのせいで」

一通り軽口を叩きあったところで、カナタは盛大に溜め息を吐いた。適当な石の上に座り込むサエキの膝には、血が滲んでいる。それを見て、もう一度溜め息を吐く。

そもそもこのキャンプ場へ来たのは、川の上流に、いい自殺スポットがないか探すためだった。

その目的は、概ね達成されたといっている。

今二人がいるのは、散策コースからもかなり外れた川原だ。ごつご

つした岩場を越えなければ来られないので、川釣りに来た人でさえ、ここまでは入って来ていないだろう。

「ちょう穴場だね。やったー」

「そのせいで今身動きとれないんだけどね」

間髪入れずに返したカナタを、サエキが横目で睨み付ける。

このぐらいの皮肉は許してほしいものだ、わざわざバスでキャンプ場まで来て、あの岩場を越えて、挙げ句の果てに遭難までしかかっているのだから。

そこそこ歩いたが、それほど上流まで来たわけでもないのだろう。川幅はそれなりにあるし、見上げる限り、そんなに高いところまできたという気もしない。

しかしそんなことより、今はサエキの手当てだ。彼女の背負っていたリュックサックの中に、コンビニに売っているような応急処置セットが入っていた。

「……準備万端じゃん」

「任せろ」

「ぜってー任せらんねー。ほら、立って」

「えー？」

「傷口洗うから」

サエキの手を引いて、川岸まで連れて行く。

わりと緩やかに流れる浅いところに屈ませて、大雑把に膝に水をかけた。

「いっ……た、」

結構傷が深いようで、擦り傷特有の、滲み出るような出血の仕方じゃない。砂や大きいごみは洗い流せたのだから、あとは手で抑えてでも止血すればいいだろう。

そう思って、流しても流しても溢れてくる血をそのままに、立ち上がろうとした時、だった。

「……カナタ」

袖口を引かれる。

バランスを崩すほどではないが、ペースを崩されるには、十分すぎるほどだった。

神妙な顔を、自分が手をかけるカナタの腕の方に向けている。

それが左腕だったので一瞬構えてしまったが、サエキの言葉は、そんなことよりも、あまりにも予想外だった。

「……ごめん」

見様によっては不機嫌そうにもとれる表情。

ぶっきらぼうにも聞こえる声色。

それが、サエキの照れ隠しなのだと気付いてしまったことが、カナタにとってその日一番の不覚だったかもしれない。

「ごめん、……こんなとこまで連れてきて、怪我なんかしちゃって」

「……サエキさん」

「なんか……その、正直……。ちょっと、楽しかった、って、いうか」

「え?。」

「こんなに気楽なの、久しぶりだ、し」

「……」

「だから、チョーシに乗りました、ごめんなさいっ」

正直に言っ。そう、率直に、そして平たくいうなら。

謝られるなんて、思ってもみなかった。

サエキだからではない。確かに奔放でいい加減だが、礼儀知らずなわけではないことは、ネット上も含めれば決して短い付き合いではないカナタは知っている。

驚いたのは、カナタだからだ。もうすぐ死ぬかもしれない人間、もしくは――これは、同意の上、というか、サエキに頼まれればの話だが――自分を殺すことになるかもしれない人間に対して、そんなふうに接するなんて。

そこまで深く考えての行動ではないかもしれない。

カナタがあまりにも文句を言うから、とりあえず謝った方がいいと思っただけなのかもしれない。

それでもなんとなく、カナタは、軽いショックのようなものを、感じていた。

「……カナタ？」

……そんなの。

やめてほしかった、そんな、まるでカナタが善意からサエキを助けていると、思っているような言い方は。

サエキが自分のことを、どんな人間だと思っているのかは、わからないけど。

なぜだか急に、妙に、それを崩したくなった。

じゅうろく

「……カナタ、どーしたの」

「……なんで謝ったの？」

「え、だって。怪我人連れてさっきの道戻るの、大変じゃん」

無防備にそんなことを言う。

カナタの纏う空気が変わったことだけは気付いているのか、伺うような上目遣い。

それが、余計に、なにかを擦った。

「へーきだよ。……だってさあ」

サエキの細い首に、手をかける。

「ここでサエキさんを殺しちゃえば、戻るのは俺一人だもん」

ね。と小首を傾げる。

サエキの表情は、思ったほどはさっきと変わっていなかった。少しつまらない。

やはり死や、殺されることへの恐怖というものが、薄いんだろうか。あんな暗黒嗜好の掲示板に出入りしているくらいだから、当然といえば当然かもしれない。

サエキは、無表情の似合わない顔で、無表情で言った。

「絞殺？ バレるよ、なんか自殺に見せかける工作しなきゃ」

「違うよ、撲殺。このまま絞めたら手の痕残るじゃん。そんなこと

しないよ」

「ねえ、前から思ってたんだけど。カナタってさあ、そんなダルそうな顔して、実はDSでしょ」

添えていた手でそのままそれを引き寄せて、耳元に唇を寄せる。

ばれた？

呟くと、サエキは自嘲的に笑った。

「あたしなんかいじめてもおもしろくないっしょ。感じやすくないし、あんま動じないし」

「別にそーゆうのには興味ないけど……それもおもしろいかもね」
「できんの？」

「さあ」

いいながら、サエキの右膝に手を置いた。

擦りむいた方の足だ。サエキの目元が、痛みに歪む。

「あ、痛い？ ごめん、忘れてた」

「てめ……いい笑顔しやがって」

そう言われてはじめて、自分が少しだけ笑っていることに気付いた。大きめの石を椅子代わりに腰かけていたサエキの前に、ひざまづくような体制でしゃがみこむ。

怯えた顔が見たかった。泣きそうな顔で逃げようともがく姿が。

自殺志願者の集まる掲示板なんか顔を出しているくせに、どこか奔放なサエキに、興味を抱いていたのだ。

死にたがってるくせに、人懐っこい。よく笑う。

どう見ても、人生に絶望している人間の態度ではなかった。

どうせ、冷やかしなんだろうと思って――実際に会ったサエキは、文字だけのやりとりとは印象が違った。

感情表現が豊かなようで、読めない。くるくると表情を変えるのは、わざとなのだろう。他人に、感情を読ませないようにしている。

なにを考えているかわからない、とは、カナタもよく言われた言葉だ。だが、サエキほど、その言葉がぴったりの人間は、見たことがなかった。

苛々した。もうすぐ死ぬはずの人間が、もうすぐ死ぬはずの人間と会って、話をして、どうしてそんなに楽しそうに笑うのか、理解できなかった。

だからだ。

いわゆる、“ありのまま”のサエキの感情を、見たいと思ったのは。

「このまま後ろの石に、頭叩きつけたらさ」

「なに？」

「川原で足を滑らせて、打ち所が悪かった不運な人。で、片付くかもね」

「カナタはどうすんの？」

「俺は……不慮の事故で連れを亡くした可哀想な人。助け呼びに行くにも、さっきの道じゃ1時間はかかるかもな」

サエキが、カナタの腕を取る。

さっきも引いた袖口。

「……ねえ」

「なに？ 他殺は嫌？」

上目がちな視線と、弱々しく握る小さな拳に、加虐心を煽られたのも、束の間。

じゅうしち

「……っ……て、え」

左腕の手首に走った激痛には、覚えがあった。

昨日、まだ傷が塞がりきっていなかったせいか。シャワー中になるべく湯がかからないようにきつく包帯を巻いてみたりしたが、効果はあまりなくて、思わず、風呂場でしゃがみこんだ。それと同じ痛みだった。

「……っ、う」

痛みと冷たさで、カナタの頭は逆に、急速に熱くなっていく。サエキが、掴んだ袖口を力任せに引いて、冷たい水の流れに、自分の手ごと突っ込んだのだ。

パーカーの袖に、包帯に、ガーゼに、水が染み込んでいく。同時に、川底の砂利と流れる勢いが、深い切り傷をダイレクトに刺激する。無理矢理に引かれたせいで体勢が崩れ、カナタの左膝も水に浸かっていた。

「痛い？ 染みる？」

普段の世間話と何ら変わらない声色で、サエキが聞く。
カナタは答えた。

「いてーに決まって……………」

ぞっとした。

左腕の包帯は、サエキにはちりとも見せなかったはずだ。特別傷を庇って過ごしていたわけでもない。

むしろできるだけ隠そうと、普段と同じように、なににも変わらないふうに振る舞っていたはずだ。

なのに、サエキは知っている。――気付いていた。

「なん……で、」

「なんとなく」

「は……？」

この間、手繋いだとき、さりげなく右手に変えたから。と、サエキは言った。

たったそれだけだ。たったそれだけのことで、気付かっていたなんて。

そう思って、カナタは、すぐにそれを自分で否定した。

違うのだ。今サエキが言った通り、『なんとなく、勘で』。

カナタは、無意識のうちに、乾いた笑いを溢していた。

「エスパーかよ……女の勘こわ、」

「ね、おんなじだね」

「は？」

サエキは歯を見せて笑った。カナタの背筋の奥の方で、なにかがぞくりと音を立てる。

血管の内側に神経があるみたいだ。血が流れるのが鮮明にわかって、そしてそれに、快感を感じているような。

気持ち悪くて、少しだけ、癖になりそう。

「痛いとき、生きてるって感じるの」

「……なんなのそのヤンキー漫画の主人公みたいな言い分」

「生きてるって感じたくて、死ぬ方法探してるんだよ、あたし」

「え？」

生きてる感じしないの。ただ寝て起きて食べて飲んで出して歩いて見て聞いて喋って遊んで触ってるだけじゃ。

呟くように囁くように、サエキが言う。

いつの間にかさっきと逆、サエキの唇が、カナタの耳元にあった。

聴覚を直接揺さぶるような言葉。

「ほんとに生きてんのかな？ あたし。全部夢なんじゃないかな？
今のあたし。目が覚めたら海のない町で普通に会社員やってる髪
の黒いあたしがいるんじゃないかな？」

「サエキさん……？ なに言ってるの、」

「夢だったらいいのについて思うことある？ あるでしょ。じゃなきゃこんなことしてないしこんな人格破綻者になってないよねあたしも、カナタも」

サエキが死にたい理由。そう思ったが、すぐに、そうじゃないと気付いた。

これは、サエキが、普通じゃない自殺方法を考える理由だ。

「ねえ」

そして、カナタに、直接会うことを持ち掛けてきた理由。

「あたし、ちゃんと、いる？」

じゅうはち

カナタは、左腕を持ち上げた。

袖から水が滴って、ジーンズを履いた太股を濡らす。

一緒に水から引き上げられたサエキの右手が、その袖口の中に滑り込んだ。肌に纏わりつく布地を捲りあげながら、冷たい指が腕を撫でる。

さつき感じた、あの、内臓に鳥肌が立つような感覚が、またした。濡れた腕があらわになる。

申し訳程度に巻かれた包帯。手首の内側に、赤いものが滲んでいる。

「傷、開いちちゃったね」

サエキの唇が動く。

しばらく口を開いていなかった気がした。無論気のせいだが、そのくらい、この状況で、サエキの声が新鮮に思えたのだ。

取って、と囁いた。

主語はないが、サエキにはわかったらしい。少し眉をひそめた。

「取って大丈夫？」

「いいよ。どーせ濡れて意味ないし」

それに、傷口、見たいんでしょ。

なんとなく言ったカナタの言葉は、正解だった。

傷を見て、痛みを感じて、生きていると認識したい、実感したい、

思い出したい。

サエキのそれは、自分の傷だけにとどまった性癖ではなかったのだ。

ゆっくりと、白い布を剥がした。カナタの細い手首に3、4周しか巻かれていなかったそれは、すぐにはらりと落ちる。

傷口に添えられたガーゼを、殊更にゆっくりと剥がしていく。そうしないと痛いから、そうしているのではない。そうした方が痛いから、そうしているのだ。

「……っ……」

息が詰まる。つい三日前の傷、それも、こんなに深いものは初めてだ。

カナタの歪んだ眉間を、サエキがじっと見ている。

それに気付いて、サエキの目を見た。

「……変態」

「カナタには言われたくないんだけど」

そう言い返すサエキの目に、冷静さがなくて、また、あの感覚。今まで見たことのなかった、特に、普段のサエキからは想像もつかないような姿を見るたびに、何度でもぞくぞくと走っている。

人の傷を見て興奮するサエキと、人の痛がる顔を見て興奮するカナタ。

どっちが普通じゃないかと聞かれれば、確かに答えは出ない。

サエキが、ふう、と溜め息を吐いた。

それは、昂った気を幾らか落ち着かせるためだった。

「深いね……」

「触んなよ」

「なんで？ 痛い？」

「血足りなくなる」

手首からはすでに細く一筋の血が滴っていて、カナタは服が汚れないように、袖を肘の上まで捲り上げた。

男にしては、異常なまでに白く細い腕。

辺りには川の流れる音だけがごうごうと響いていて、まるで自分たち二人以外のなにかもを飲み込んでしまおうと しているみたいに感じた。

きつと、サエキの指が絡む左手を、すぐそばの川の水に浸けていれば、数時間後にはカナタの体からはほとんどの血液が抜けている。

真っ青で、神秘的なほど美しい死に顔になっているはずだ。

そう言ったのは、カナタ本人だった。

できれば体から血が抜けていく間中、その感覚を味わっているカナタの顔を眺めていたいと、サエキは思った。

じゅうく

サエキは思わず、唇を寄せていた。

カナタは腕を引くが、横目で与えられた視線に、動けなくなる。

「ねえ……ね、カナタ」

「……な、に」

冷たい肌に舌を這わせたまま、舌足らずに尋ねた。

カナタが意外と、目に見えて困っている。サエキは、舌を出したまま、笑った。

「痛い？」

そう聞くと、一瞬、カナタの眉がしかめられる。

痛そうに——というよりは、痛々しそうに。

「生きてるって感じ、する？」

白い腕と赤い血と、真っ赤な舌。

少し赤らんだサエキの顔を見たとき、カナタは、さっきから自分を苛むこの感覚が何なのか、気付いてしまった。サエキもこの感覚を共有していると（正しくは、サエキも似たような衝動に動かされていると）、気付いたからだった。

触りたい。触って、サエキの表情が変わる瞬間を見ていたい。

——（別にそーゆうのには興味ないけど）

そう、ついさっき、言ったはずだったのに。

——（それもおもしろいかもね）

気付いてしまったのだ。

自分は、この人に、——欲情している。

いつの間にか手のひらを掴んでいたサエキの指を握って、顔を離させる。不満気な表情。

アヒルみたいに尖らせたこの唇が、つい今まで自分の傷を抉っていたのだと考えると、今すぐに泣きそうに歪ませてみたくなった。心臓がぞくりと、嫌な音をたてる。

「……カナタ？」

その手のひらを頬へ滑らせる。ところどころに掠れて付く血が、やけに扇情的に見えた。

サエキの肌越しに、自分の血を舐め取る。細い肩がぴくりと跳ねた。

「ちょ！？ え、かな」

「ねえ、生きてる実感欲しいんだよね」

目を丸くしたまま、サエキが頷く。

「俺、自分が痛いのもってやなんだ」

「え、な」

「どーせなら、気持ちいいほうがいいでしょ？」

サエキの肩が強張っているのを、項に触れた手で確認して、カナタは今度こそ、自分の口許が笑っているのを自覚した。

にじゅー

我に返ったというか、着地したというか。

空みtainなサエキの空間に、ふらふら浮いていたような感覚が、山の麓の川原に引き戻されたのは、一瞬にしていたことだった。

「……あ、」

サエキが、小さく声を出す。さっきまで出していたような、掠れた切羽詰まったものではなかった。

雫が、ぽとりと落ちてきた。

髪に、手の甲に、サエキの、擦りむいた膝に。

カナタの、すでに濡れているパーカーの袖に、手首の開いた傷口に。いつの間にか、どちらも、出血は止まっていた。

「雨……」

そう呟いたサエキの顔を見る。サエキは上を見ていたが、その目元や頬は、赤く色付いている。

さっきまでのサエキの表情は、今まで何をして何をも何も言っても飄々としていたサエキが見せた表情は、間違いなく、カナタが見たいと思った種類のものだった。

頬を冷たいものが掠ると、頭が急激に冷えていく。こんなところで。

(……なにする気だったんだ、俺)

気付けば、濡れた服が夕方の空気に冷えて、随分体温が下がっている。サエキの頬に触れたままの指先は、青白くなっていた。

膝上のショートパンツに半袖という出で立ちのサエキも、そうだ。

「……カナタあ」

名前を呼ばれる。顔を見合わせた。

サエキが、すん、と鼻で息をする。

カナタは、頬から離れかけていた手のひらを、そのまま肩に置いた。俯いて、サエキの細い肩に、頭を乗せる。

「……ごめん」

「……カナ、」

「ごめん。」

サエキの耳にだけ届くように、水の流れる音に消されそうな声で、囁いた。強張っていたサエキの体から、少し力が抜けるのがわかる。手のひらを肩から、手首まで降ろしていく。腕が冷たくなっていた。きつとここで死ねば、まだ夏の暑さが残っているとはいえ、数日やそこらじゃ死体は傷まないだろう。

ごめん、とまた小さく言ったカナタの手を、サエキの手が握った。指の長さも、手のひらの大きさも、厚さも、カナタとは違う。

冷たい指が触れ合う。顔上げて、とでも言うような触り方。カナタは手を上に上げようとしたが、サエキの指は離してくれなかった。

「ねえ、」

寒いね。と、サエキが囁く。

「……帰ろっか。」

にじゅういち

「カナタってさあ、海みたい」

ぽつりと呟いたサエキに、顔ごと注意を向けた。
聞いているよ、の反応だ。

「南のほうの、キレーで透き通ったカラフルな海なんかじゃなくて
さ。暗くて深くて冷たい海。ここから見える海」

「……俺ってそんなに根暗っぽい？」

「あは、かなりね」

サエキの方こそ、海に浮かんで漂うような話し方をしている。
ふらふらとか、ゆらゆらとか。

「クリオネみたいだね」

サエキが言った。

「ひらひらしてて掴み所なくって。ほんとにいるのかわかんないし」
「水族館にいるよ？」

「見たことあるよ。でもさ、水から出したら消えてなくなっちゃい
そうじゃん」

「そうかな」

「あたしはそう思ったの。綺麗なのって水の中だけかなって」
「ふうん……」

曖昧な相槌を打ちながら、クリオネ、の話ではなくて、今は自分の

話をしていたのだと思い出す。

「クリオネ、意外と凶暴だよ」

「知ってる」

「見た目かわいいいけど、肉食だし、食事シーングロいし」

「知ってるよ」

「……俺のことそんなふうに思ってたんの？」

「……だって、あん時」

「や……、あれはそういうつもりじゃ」

俯いたサエキに慌てて言うのと、上げた顔は笑っていた。小さないたずら。

カナタも小さく苦笑いを溢す。

「クリオネの赤いところあるじゃん」

「うん」

「昔ね、あれが心臓なんだって、本気で信じてた」

「ああ……俺もそう思ってたかも」

「生きてるのがさ、外から見えるなんて、羨ましいよね」

「そーゆうとこ、俺は似てないでしょ」

「うん……そーかも。カナタ、生きてても死んでもおんなじ顔してそう」

「なにそれ」

「その顔だよ。クリオネみたい」

「え？」

「冷たくて何考えてるかわかんなくて、綺麗で」

反応に困って、カナタは、サエキを横目で見る。
サエキはカナタの方を向いていなかった。

「クリオネのあれ、消化器とか生殖器とかだよ？」

「それさあ、自分は食えることとやることしか考えてませんって言うてんの？」

「ちげーよ」

けらけらと笑う声が、二人しかいない空間に響く。

「サエキさん、そんなに不安なんだ？」

「え？」

「“生きてるのが外から見えるなんて、羨ましい”」

「ああ……だって、人は外からわかんないから」

「そうかな。」

「あたしが生きてる証拠なんてさ、一個もないんだよ。カナタにもね」

「証拠ね……それって、死ねばわかんのか？」

「だって、死んだら、それまで生きてたってことでしょ？」

「死んだ本人にだけはわかんないよ」

「うん、だからさ、あたしが死ぬところ、カナタが見届けてよ」

「……俺が？」

「そ。カナタが、あたしが生きてたってこと証明してよ」

「ふーん……心中でもしたいのかと思ってた」

「違うよ。だって、カナタ——」

不自然に途切れた言葉。カナタは、サエキの方をちらりと見た。

サエキは、まだ真正面を向いている。まるで、そこに鏡があって、鏡越しにカナタの顔を見て会話しているみたいだ。

「眠るように死ぬのが、一番、人間らしい気がしない？」

「そんな死に方がいいの？」

「うん……失血死がいいかな。本当は、凍らせてほしいんだけど」

「凍死？」

「んーん。凍らせて、海に流してほしい」

「海、好きだね」

「うん、海好き」

呑まれたくなる。サエキは、前を向いたまま、囁いた。人形のようにだった。

「ねえ」

「ん？」

「俺が海なら、サエキは空かな」

「そう？ ……それ、髪の色じゃん」

「違うよ。サエキは、冬の空」

「冬？」

「冬の空って、白黒じゃない？」

「ああ……それは、わかるかも」

「朝は真っ白でさ。夜は真っ黒で」

「なーに、あたしは真っ黒って言いたいわけ？」

「違う。サエキさんは」

冬の、夕方。

カナタも正面を向いた。鏡はもちろんない。

冬の夕方の、暗い青と、紫と、白と黒が混ざり合ったような。山のこっちとあっちで色が違う、一瞬だけの空。

「いいよ、俺」

「え？」

「サエキさんが死ぬところ、見てる」

「……カナタが死ぬ時は？ 誰が見てるの」

「誰もいないよ」

「いないの？」

「俺のこと、誰も知らない場所で、死にたい」

「淋しい人だね」

「そう。淋しい人なの、俺」

「サエキさん、知ってる？ クリオネって」

「死んだら溶けてなくなるんだよ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3693y/>

人生の楽しい終わらせ方

2012年1月13日18時53分発行